

1. 新たなビジョン(素案)の説明

武内市長：

皆さまこんにちは、武内です。

北九州市は 92 万人の人口があり、492 平方キロメートルという九州最大の面積をもっています。人口だけ見ても、この世界中に北九州市より小さい国が 40 もあります。そして、これまで培ってきた様々な産業の力、自然の力、人の力、これらを活かして、どういう未来に向かって北九州市の未来像を描いていくのか。皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

北九州市を愛する気持ち。多くの方々にこれまでも伺ってきました。これまで 10 か月議論を重ねてきました。前回 16 年前は、22 か月かけて作ったものを、今回は多くのスタッフ、関係者の皆様の頑張りで、9 か月～10 か月で素案を作りました。7 区 9 回のミライ・トークの場では、毎回 100 人以上の方々にお集まりいただき、15,000 人以上の方が Web で視聴されました。アンケートでは、45,000 人の方が答えてくださいました。76 の団体、53 人の有識者の方にもご意見を伺いました。有識者会議は 4 回開かれ、本当に多くのご意見を頂戴しました。

そして、私が気付いたことは、みんな北九州市に対する強い愛着を持っているということ、そして北九州市の未来に向かって、愛着、プライド、希望を語ってくださいました。老若男女、シニアの方、経験豊かな方は、このまちが歩んできた歴史、発展した歴史をお話ししてくださり、高校生や大学生など若い人たちは、未来に向かってこんなまちにしたいという思いを交わしてくださいました。このような様々な方々の議論を経て、いよいよ素案を取りまとめることができました。

11 月 22 日、新ビジョン、北九州市基本構想素案、基本計画素案が出来上がりました。

今回はなるべく薄く、内容の濃いものにしよう、そして多くの市民の皆さんがこの文章を取り合って、まちの各地で様々な議論ができる、まちのことを考えることができる、そのような新たなビジョンを描こうと取りまとめてまいりました。

今日は、新ビジョンで提案させていただいた、“目指すべき都市像”とそこに込めた思い、についてお話しさせていただきます。

今回の新ビジョン素案の中で示した目指す都市像は、“つながりと情熱と技術で、「一歩先の価値観」を実現する グローバル挑戦都市・北九州市”です。この目指すべき都市像の中には、どんな力で、“つながりや情熱や技術で”、どこを目指して、“「一歩先の価値観」を実現する”、どんな姿勢で、“グローバル挑戦都市、北九州市”、このようなポイントを挙げています。

一つ一つ見ていきましょう。まず、どんな力でこのまちを前に進めていくのか。不易流行という言葉があります。時代を超えて変わらない価値、このまちで守り続けていかななくてはいけない価値があります。それが何かということについて議論を重ねてまいりました。

これまで 10 回以上のミライ・トーク、若い人たちや女性など色々な回を通じて、不思議な感覚に襲われました。皆さんのおっしゃる言葉に共通点がありました。繰り返し、繰り返し出てきた言葉が、「つながり」です。どの区に行っても、このまちのすごさは「つながり」であると。人がしっかりとつながって困った時に支え合う、地域の中で結び合うそれが魅力だ、そこを大切にしたいということでした。

近畿地方から北九州市へ引っ越して来られた、あるママの話があります。このまちで、商店街で買い物をする、商品を買うだけではなく、ベビーカーで来ていることに気付いて、飴をプレゼントしてくれる。何か必ず、人と人がつながろうとしてくれる、それがこのまちの素晴らしさです、という声も聞きました。

そして2つ目は、「情熱」です。とにかく北九州市の人は、情熱、熱いということを言われます。企業誘致などを通じて東京の企業などと会っていると、なぜ北九州市に進出を決めたのかと聞くと、とにかく行ったときに、市の職員やまちの方々があつた、人の距離がものすごく近いと言われます。単身赴任で来られた方からも、このまちに居ると、一緒の店にいる方から声を掛けられたり、初めて行く店も2回目に行くともう常連のように扱ってくれる。距離の近さが魅力ですということ聞きます。もちろん、祭りもたくさんあります。皆さんが力を結集して、新しいもの、盛り上がるものに力を集中させる魅力がある。それも北九州市の宝です。

そして、「技術」です。いうまでもなく、北九州市は、ものづくりのまちとして日本中に知られています。中小企業、大企業も多く、そこに込める魂、思い、素晴らしい力を持っています。その力をどんどん結集して、さらに未来に向かって挑戦していこうということです。

「つながり」、「情熱」、「技術」、すべては、人、人、人です。人の力を、北九州市の宝として、これからも活かして行ってほしい。皆さまの声として凝縮したものが一つ目のポイントです。

2つ目は、「一歩先の価値観」を実現するまち、です。変化の激しい時代、先の見通せない時代を迎えています。人生観、社会観、世界観、歴史観、色々なものが変わっていきます。価値観はどんどん変わっていきます。しかし、その中でも「一歩先の価値観」を目指す、そしてそれを実現しようという思いです。

皆さん振り返ってみてください。北九州市はそれを実現してきたまちです。八幡製鐵所は、日本の近代を引っ張り、新しい時代をこの日本にもたらしました。そして、経済発展の後、公害に直面し、公害の経験を克服して、次は環境の時代だということで、環境先進都市の道、この価値観を生みだしてきました。今は、グリーン、脱酸素などのエネルギーを作り、そして、人口減少と高齢化が加速する日本において、地域が少しずつ色々な結束を失いつつある時代において、新しい価値観、新しい人の生き方、人の幸せを提案するチャンスが北九州市が持っている、一歩先の価値観をつくることにチャレンジをしていきたいと思えます。

これからの時代は、様々な価値観が出てくるでしょう。色々な考え方があっていい、その多様性をも包含しながら、様々な価値観を取り込みながら、一歩先の日本、一歩先の世界の姿を見せ続ける、そして体現しつづけるまちでありたい、という思いを込めています。

3つ目のポイントは、グローバル挑戦都市です。これも言うまでもありませんが、八幡製鐵所ができたあの頃は、日本中が北九州市を見ていました。そして、北九州市は世界を見ていました。まさに、グローバルとつながっているまちです。安川電機、TOTO、日本製鉄、三井ハイテックなど、ビッグビジネスを生んでいるのが北九州市の強さで、それを支える多くの企業がおられます。世界に先駆けて、環境先進都市として、SDGsの先進都市として、世界とつながろう、世界に影響を与えよう、それこそが北九州市の持つDNAだと考えます。

今回の新ビジョンは2040年までと20年のスパンを置いています。その先の100年先も200年先も、このまちに住まう方が、来られる方が、そして歳を重ねる方が本当の意味で幸せを感じられる仕組み、形をこの新ビジョンで描いていきたいと考えています。

この新ビジョンの目指す都市像、「つながりと情熱と技術で、「一步先の価値観」を実現する グローバル挑戦都市・北九州市」をどう進めていくのか、その戦略についてお伝えしていきます。

今回、私たちは何のためにこの市があるのか、どうすれば市全体が幸せになる、市民の皆さんが幸せになるかを考えて、議論を続けてきました。経済発展は大事なことです。真の目的は幸せであること。幸せの定義は人それぞれかもしれないですが、日々の営み、経済活動、文化活動、医療活動、子育て、教育など、色々なことをばらばらに論じてあれもこれもやる、ということではなく、まちは生き物であり、しっかり循環するようにつくっていかうということで、「成長と幸福の好循環」という姿を掲げています。

「稼げるまち」の実現ということで、まずは元手が必要です。人を守るにも、人生を、まちを守るにも元手が必要であることから、しっかりと稼いでいく。これが根本であり、そこから我々の自立、尊厳、プライドが生れてくる。

そして、稼いだ元手で、「彩りあるまち」を実現していきます。彩りあるまち、カラフルなまち、色々な包容力のあるまち、言い換えれば多様性という言い方もできるかもしれません。また、色々な人が自分らしさを大切にできるまち、ということで、選択肢の多いまちという言い方もできるかもしれません。

「彩りあるまち」をつくることによって、自分らしく、自分の思う歳の重ね方、人生が実現できることによって、そこに私たちは、安らぎを感じる事ができる、ということで「安らぐまち」の実現につながっていきます。子育て、教育、医療、介護、福祉、文化、色々な意味で、心と身体、精神の安らぎを感じられるまちにしていく、ということが最終的な私たちの目的となります。色々な人がお互いに支え合い、安らいで日々を過ごすことができるまちを作っていく。

稼いで、彩りあるまちをつくり、安らぐことができる。安らぐことができて安心してまた未来に向かって稼ぐことができる。このサイクルを作っていくということ。どこかに優先順位を設ける、どれかだけに注力をするということではなく、ぐるぐると生き物のようにこの循環を回していくということの中に、我々の新しい都市像のポイントがあります。行政はあれもこれもとなりがちですが、循環を回していくというのが私たちの思い一つになっています。

それでは順番に見ていきましょう。「稼げるまち」ということで、元手を作らなくてはなりません。今、コロナの時代、そして様々な物価高、生活、日々の営みにも多くの困難を抱えています。それを乗り越えてでも、必要な住民サービス、必要な投資、未来のことも若者たちへの教育をやっていくためには稼がなくてははいけない。

なぜ、いま北九州市が「稼ぐ」ことにこだわらなくてははいけないのか。スライドは縦軸に経済成長率、横軸に人口増加率をプロットしたものとなりますが、20の政令都市がある中で、この10年間を見ると、北九州市は、経済成長率は浜松市と並んでほぼ最下位、人口増加率は最下位と、経済も人も縮んでいるのが北九州市の現状です。未来を考えるためには、現状を直視しなくてはなりません。

経済が発展すれば雇用が増えます。雇用が増えれば人口が増えます。人口が増えれば経済が発展します。これらは当然のことです。この循環を何とか回していきたいですが、今はこの循環が逆に回ってしまっています。政令指定都市を見ると、経済成長率と人口は比例しています。この状態から脱却をしなければいけません。

更にデータを見ていきます。経済の成長率は他の政令都市に比較しても北九州市は非常に低い所で低空飛行している状況です。土地の価格も、向上していません。土地の価格が上がるといことは、その場所の価値が高まる、すなわち投資がされる。投資がされると、色々なビルが建ち、お店ができて人が集まってくる。これも現状は伸び悩んでいます。自ずから賃金も北九州は伸びていません。

この状況を何とか変えていきたい。ただ、北九州はこんなものなのではないでしょうか。まだまだやれる余地が膨大にあると確信しています。全く悲観する必要はありません。これからが大事なポイントです。どうやってこれらを実現していくのか、そこに向かって掲げた戦略のポイントをお話ししていきます。

「稼げるまち」に向けた3つのステップということで、「知ってもらう」「始めてもらう」「定着してもらう」ということです。人や企業、全国の人に、北九州市が持つ素晴らしいポテンシャルについて知ってもらう。そして、事業を始めてもらう、新しいビジネスを起こしてもらう。さらに、起こしてもらい、成長して大きくなってどこかに戻るのではなく定着してもらう。この3つをやらなくてはなりません。

まず1つ目に、「知ってもらう」のキーワードが、空港、観光、エンタメです。北九州市は、良いものがたくさんあるのに、PRベタ、口下手、シャイだと言われていますが、非常にもったいないです。

キーワードの1つ目は、「空港」です。今年の3月に3年後に滑走路を3000mまで伸ばすための工事が着工しました。滑走路が3000mまで伸びると、大型のジャンボジェット機に、荷物を目いっぱい積めることができ、ヨーロッパや北アメリカに飛ばせるようになります。福岡市が伸びたのも空港が大きく、空港で差がつかしました。北九州市の空港は2006年開港という比較的新しい空港です。国土交通省に行っても、全国に数多くの空港があれども、未来に向かってこれだけ可能性を秘めた空港はそれほどないですよ、北九州空港はまだまだやれますね、と言われます。北九州空港へのアクセスをどう良くするのか、どんな路線を誘致していくのか。あるいは、空港や空港島をどう活用していくのか。色々な可能性があります。人や物がどんどん往来することによって北九州市を知ってもらう。来年の4月からはヤマトホールディングスが国内専用の貨物便を1日10便飛ばすことを決定してくれました。このように流れを作っていきます。

「観光」も大きな要素です。北九州市には、歴史も、自然も、都会も、人情も、美味しい食べ物もある。これらが揃っていて、もっと観光地になってもいいのではないかと思いますし、そのような声もよく聞きます。世界遺産も2つあります。お城だってあります。門司港レトロも、関門も、小倉城も、小倉のまちも、旦過も、戸畑も、八幡も、若松も素晴らしい。素晴らしい建物も若戸大橋も皿倉山もあります。これらをうまくつないで、点ではなく線や面にしていけば、もっと多くの人が集まり、ありていに言えばお金を落としてくれる。それによってどほどの魅力が広がっていく。来年の2月には、全国で初めての市版の「地球の歩き方」が刊行します。ブラタモリもありました。今、北九州市の存在感が変わろうとしています。

そして、「エンタメ」です。漫画やアニメ、映画など、北九州国際映画祭は本日が最終日ですが、文化の力、エンタメの力をもっと使える、もっと形にできます。北九州市で多くの作品が撮られ、作られて、そこを目の当たりにしながら、次の若い世代の人たちがエンタメの世界に、アジアに出ていく。そういった人材を輩出していくような可能性も北九州市には十分あるため、そこにまずは力を入れていきます。

次にステップ2として、「始めてもらう」。来てもらう、新しい産業をどんどん起こしてもらう、大きくしてもらうという可能性も十分にあります。

まずは、「半導体」ということで、シリコンアイランド九州と言われていますが、北九州も半導体関係で100社ほどが既に集積しています。これからも半導体の中で、北九州市の技術力、力を結集してやっていきます。また、「電気自動車」EVということで、3日前に蓄電池関連の会社が立地することを発表させていただきましたが、そういった部分にもしっかりと力を入れていきます。

次に「スタートアップ」ということで、北九州には様々な社会課題がありますが、それらを解決するためのスタートアップを歓迎し、また地元の企業と組んで新しいスタートアップ企業を増やしていきます。北九州市にはテクノロジーやモノづくりの基盤もありますし、大企業の方がリタイアした後に、あるいは途中で若い方と一緒にスタートアップを起こすということも可能だと思います。また、シニアベンチャーのように、経験のある方がベンチャーを起こすということも北九州らしさとして期待できます。

また「市内企業の生産性向上」ということも、十分にやる余地があり、大企業、中小企業を含めて、まだまだ可能性があります。コロナを機に新しい業態に変えて空気清浄機を作っていたフジコーさんや、もともと持っている技術を生かしてマーケットの大きな医療分野に展開しようとしている会社など、大化けする中堅企業も北九州市には技術力があるのでたくさんあります。デジタルやデータを活用したり、またデザインを良くしたりすることで付加価値を高めたり、グリーン電力を使用することで新しい企業の形を北九州市から見せていく。そういった企業の力を強くしていきます。

続いてステップ3は定着してもらうということで、「グリーン×テクノロジー」をいずれは北九州市の代名詞としていきたい、またそうしていかなくてはなりません。洋上風力やリサイクル、環境先進都市としてエコタウンもあります。エコタウンを世界に輸出したいということでインドの企業がやってきていたりもしています。世界に先駆けてグリーンに取り組んできた、それを裏打ちするテクノロジーがあるということです。

「ウォーカーブルなまち」ということで、いま世界中で、車を通さない街路で地球にも人にも優しい、ウォーカーブルシティがどんどん広がっています。歩道を大きくして、車が通る所を狭くするよう流れが、大阪でもやられています。ニューヨーク、マンハッタンでは、道路を歩行地区にして、常時歩行者天国になっているようなイメージです。そうすることで、人が行き交い、声を掛け合い、地球にも人にも優しいまちづくり、という1つの方向性です。

また、環境と経済成長が調和した、「サーキュラーエコノミー」ということで、サーキュラーとは循環するという意味ですが、循環するまちづくりです。北九州市こそ、物には命がある、この世の中にはゴミというものはないという発想に近い、リサイクルの社会や経済を作ってきました。北九州市がそういった世界観をより形にしていくことで、非常にエシカルな暮らし、住んでいて、生きていて充足感のある生き方ができるまちにしていく、

これによって定着をしていただくということです。

また、シニアエコノミーということで、高齢者の方が、健康を維持しながら学び続けることができる、また、小さな空き家を使ったレストランで、栄養価の高い少量の食事をセンスの良い器を使って出すなど、次の時代の新しい豊かさ、新しい成熟した大人の楽しみ方ができる。北九州市はこういったことにもチャレンジできる位置にあります。歳を重ねていろいろな生き方を選択できることも大事だと思います。

稼いだ後にどのような結果を出していくのか。北九州市と福岡市における GDP、経済の規模の推移を見ると、1980 年代後半から大きく差がついてしまっています。1980 年ごろは経済の規模は同程度でしたが、様々な理由があって、2020 年までの 40 年間に、ほぼ倍ぐらいに福岡市が伸びていってしまいました。北九州市はずっと 4 兆円の壁を越えられず、停滞を続けてしまっています。この 4 兆円の壁を突破して、新しいステージに北九州市を持っていきたいと思います。

今回定量目標として、今後 10 年以内に、市内 GDP を 3.66 兆円から 4 兆円を突破することを掲げています。ただこれは、市役所が一人旗を振ってできる事ではありません。行政は強い意志を持つことはもちろんですが、何より経済界、そして市民の皆様、そして大学など教育・研究機関も大事です。それらの力を結集して、新しい時代に稼ぐまちを作っていきます。

しっかりと稼いだ後はそれをどう使っていくのかということで、次に「彩りあるまち」です。

先ほど申し上げたように、「彩りあるまち」とは、言い換えれば、「多様性のまち」、「選択肢がたくさんあるまち」。老若男女、障害の有無、国籍、趣味嗜好、価値観、色々なものがある中で、自分らしさを大切に、様々な選択肢があるということです。

まちの中に好きな音楽がかかっているカフェがあったり、自分が住みやすいデザインの住宅があったり。オーガニックの製品が揃うお店があったり、多国籍な料理を出すレストランがあったり。色々な音楽が楽しめてまちのあちこちでコンサートが開かれたり、絵が好きな人はアトリエやミュージアムがあるということも大きな要素かもしれません。多様性、選択肢ということでは、教育もそうかもしれません。みんなが今の教育システムに収まるということではなく、自分の好きなことに集中できる、あるいは受験がなくても、小中高と自分らしく青春が全うできる教育機会がある。不登校やいじめの問題など、様々な個性に合わせた教育の選択肢がある。彩りがある。言い換えれば、選択肢や多様性があるまちというのは、都市全体に余白があると言えるかもしれません。決められた枠でやらなくてはいけないのではなく、様々な包容力を持つまちへと変えていきたいということです。

そして、彩りあるまちで自分らしさを維持する、自分らしく生きることができれば、「安らぐ」ことができます。厚生労働省の出身ですが、現実問題として、医療、介護、認知症の問題、老々介護の問題、また子育ての問題など色々とあります。また、この状況の中でどうやって今の生活を守っていくのかという現実的な問題があります。それを、しっかりと地域、まち全体で支えていく、守っていく、そういうまちです。

先ほど飴玉の話もしましたが、制度や行政だけではない、地域の中のつながりも大事です。自治会活動も今、少しずつ小さくなりつつあります。一肌脱ぐ、困った時には力を貸す、これが北九州市の大きな力です。東京の新宿区には「暮らしの保健室」というものがあります。団地の 1 階で、元看護師や大学生など、様々な地域の方が空いた時間にそこに

集まり、色々な心配事や悩み事を聞いてくれる場所をつくる取組があります。例えば、薬の飲む量を間違えたとき、電球を替えたいけれど替えられなくて困っている時など、生活の中で生まれるモヤモヤした悩みごとを地域全体で解決しようという取組みです。それこそがまちの力、社会の力だと思います。「安らぐまち」にしていくには様々な要素がありますが、それを一つ一つ解決して積上げていく優しいまちづくりです。

もう一度、3つを見ていくと、「稼げるまち」、「彩りあるまち」、「安らぐまち」はすなわち、「強いまち」、「楽しいまち」、「優しいまち」であるということ、これらは全て循環しています。これを実現していく。これが新たなビジョンに込めた思いを、ぐるぐる回していくというまちづくりを目指していきたいと思います。

目指す目標は分かったけれど、どうやっていくのかということで、素案の中に、13の成果指標、数値目標を掲げさせていただきました。行政としてはかなり思い切ったことです。ストレッチゴールと言いますが、ストレッチというのは少し届かない、きついけれども目指していれば少しずつ変わっていく、ということで今回はそのようなストレッチゴールを掲げさせていただきました。

その中には、地価、合計特殊出生率、健康寿命、社会動態という要素を入れています。もちろん、これは野心的な目標であり、これからみんなで力を合わせて進んでいかなくてはいけない目標を含んでいます。行政としては、どうしてもできることを目標にかけることがありますが、できることを目標としても面白くないということで、ここを目指していくのだというストレッチゴールを入れています。やはり健康で、経済が発展し、子ども、教育環境が多様に用意をされることで、どんどんと人を惹きつけ、企業を惹きつけていく。そして人口を増やしていく、そして100万人への道筋を作っていく、という思いをここでは掲げています。

このような野心的な目標も今回は新たなビジョンに入れさせていただいています。これを実現するためには、すべての立場、利害、属性を超えて力を合わせていかなくてはならないという決意です。

これまで、様々な議論をさせていただきました。そして、最終的な案の確定までは、まだ議論を続けてまいります。1つ言えることは、本当に北九州市民の皆さんは、老若男女、このまちを愛する気持ちは強いということ。また、このまちに誇りをもって堂々と次の世代へ引き継いでいきたいという思いが強いということです。

後から後から続いてくる、可愛い者たちのために、自分にできる何かをしたいのだ、と坂村真民さんという方が詩でも書いています。この生き物であるまちを、次の時代に向かって、責任をもって堂々と引き渡していく。そして、北九州市に生まれて、育って、働いて、歳を重ねてよかったと言われるまちづくりを、皆さんと進めていきたいと思います。これからです。北九州市がこれから反転攻勢をして、力強くもう一度その力を発揮するまで、皆さんと一緒に進み描いていきたいと思います。

最後に、新たなビジョンの素案の端書に書かれた文章を紹介して終わりたいと思います。市役所のスタッフの皆さんの思い一つにして紡いだ言葉を紹介します。

“ひとの数だけ、スポットライトがある。
だれもが主人公になって、イキイキと
自分の人生をもっと好きになって進んでいく。

一人ひとりに宿る力を、
もっと支え、挑戦を後押しできる都市へ。
積み重ねてきた歴史を、
脈々と継承し、新しい価値を生みだせる未来へ。

多様な個性がまざりあい、つながりあうからこそ
生みだされる価値は、日本のみならず世界へと大きく広がり、
だれもが豊かで安らげる未来をつくっていきます。

つながりと情熱と技術で、
「一歩先の価値観」を実現するグローバル挑戦都市へ。
さあ、愛さずにはいられない未来を、北九州市から。”

皆さん一緒に考えていきましょう。ありがとうございました。

2. パネルトーク

司会：

ここからは、「新たなビジョン」の「素案」を深掘していく「パネルトーク」に移らせていただきます。新ビジョンの検討にあたりましては、地元有識者の方々に専門家の視点からご意見をいただき、「新ビジョン検討会議」を重ねてまいりました。本日は、その会議にご参加いただいた有識者のうち、3名の方にパネリストとしてご登壇いただきます。

まず、北九州商工会議所会頭 津田 純嗣さまです。1976年に株式会社安川電機に入社され、代表取締役社長、代表取締役会長などを歴任され、現在は特別顧問に就任。2021年7月からは、北九州商工会議所会頭を務めていらっしゃいます。

続きまして、公益財団法人 北九州産業学術推進機構 理事長 松永 守央さまです。1996年に九州工業大学工学部教授に就任。その後、2010年に九州工業大学学長に就任。2016年からは、公益財団法人 北九州産業学術推進機構 理事長を務めていらっしゃいます。

続いて、株式会社 Quore 代表取締役 宮坂 春花さまです。大学在学中に、女子大生が作る、女子大生の為の海外留学プログラム、Mahal.KitaQ を立上げ、2020年に法人化。2022年に、北九州市の地方創生と若者コミュニティ運営をメインに、株式会社 Quore を創業。現在は、東京と北九州市の2拠点で活動中です。

このパネルトークには、引き続き、武内市長にもご参加いただきます。また、パネルトークの進行は、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社副主任研究員でいらっしゃいます、丸川さんをお願いします。

進行（丸川氏）：

それではパネルトークをはじめて参りたいと思います。改めまして進行を務めます、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングの丸川と申します。

このパネルトークでは、先ほど市長からも説明がありました、3つの重点戦略「稼げるまち」「彩りあるまち」「安らぐまち」のポイントをテーマに、有識者の方々にお話を伺ってほしいと思います。会場の皆様には、入口にてお配りした新たなビジョンの概要版資料をご覧くださいながらお話を聞いていただければと思います。

それではまず、「稼げるまち」の実現をテーマといたします。

有識者の方のお話に入る前に、「稼げるまち」の実現について、概要を簡単にご説明します。「稼げるまち」の実現の戦略としては、大きく3つの項目があります。まず、陸海空のネットワーク構築や近隣市町との連携など、「稼げる基盤」づくり、若者や女性をはじめとした多様な人材の就業や起業を後押しする「稼げる人」の育成、企業誘致に加えて、民間主導による企業の魅力や生産性向上、新たなビジネス展開など、「稼げる産業」の創出。これらの取組を通じて、「人も企業も潜在力を開花できるまち」を目指していきます。

それでは、まずお一人目、津田さま、「稼げるまち」の実現に向けたポイントについて、お話をお願いします。

津田氏：

津田でございます。よろしく申し上げます。産業人の視点から「稼げるまち」と言いますと、3つの方法があると思います。まずは、今ある企業の発展、二つ目が新たな起業、産業の創出、三つ目は外からの招へいということになります。

外から企業を招こうとすると、まず必要なのは、事業を行うに相応しい場所の供給です。北九州は天災が少なく、まだまだ整備は必要ですが、陸海空の交通の要地という強みがあります。一方で、工場用地が不足しているということや、IT用のビルがないなど、様々な課題があり、この辺りについての準備も必要です。さらに、半導体であれば水が必要、データセンターであれば大規模な電力供給など、我々の狙う産業に合わせた基盤の準備をしておく必要があります。

次に人材供給力が重要視されると考えます。北九州には大学や専門学校がたくさんあり、企業にとって魅力的なまちです。また、北九州市立大学が、文科省から成長分野への転換に関わる支援事業に採択され、令和8年、9年度に、各学年定員120名の情報イノベーション学科を創設できることとなりました。これは企業から見て魅力であるため、非常に楽しみにしております。デジタルトランスフォーメーションは、まちの企業の改革、あるいは新しい事業の立上げにも大きな役目を負うことになります。デジタルトランスフォーメーションは事業の付加価値を上げ、幅を広げる強力な武器です。新たな情報イノベーション学科が街中にできると、市内の人々との協業や若者たちと共に学びができることにより、まちの活力が増すと思っています。

産業を前に進めるためには、我々が基盤を整え、仕事をする力を付けることが重要だと思っています。

進行（丸川氏）：

ありがとうございます。産業人の育成という部分で、市立大学に情報イノベーション学科ができるというお話。また、協業や学びという部分で、経済一辺倒というよりも、人が必要であるというお話だったかと思えます。

武内市長：

大事なご指摘をいただいたと思います。条件は良いけれども、土地やしっかりとした水、電力を確保する必要があるということで、先日も半導体企業の誘致があと一步のところまで行きましたが、土地などをもう少し早く準備しておかなければならないという問題もあり、非常に悔しい想いをしました。

他方で、南海トラフや首都直下地震のリスクがあるというなかで、この100年の間に震度4以上の地震が3回しかない。災害に強いという面は、東京の企業にも刺さる部分だと思えます。その点については、バックアップ首都構想を掲げて、アピールに取り組んでいきたいと思えます。

進行（丸川氏）：

ありがとうございます。続いて、お二人目、宮坂さまお願いします。

宮坂氏：

私は「稼げる人を育む」という点について、意見を述べさせていただきたいと思えます。

はじめに、スタートアップの創出、成長というところで必ずしも「スタートアップ」である必要はなく、まず起業してみる、フリーランスとして自分一人でやってみるところから始めてみても良いのではないかと考えています。そのような起業をしやすい環境づくりをサポートしてもらえらる仕組みを作っていけたら良いのではないかと考えております。

今、Z世代の若者の7割が日本に希望が持てないというデータがありますが、実際のところはどうかというと、自分自身は希望をもって起業しているので、残りの3割の方ではないでしょうか。若い子たちが希望を持てるようなまち、そして環境にしていければと良いと思えます。また、起業家育成というと、高校生や大学生を対象にアントレプレナーシップの教育をしがちですが、小中学生からアントレプレナーシップの精神を育む教育が必要なのではないかと思えます。

進行（丸川氏）：

ありがとうございます。起業された宮坂さんならではの視点ということで、大学生になっていきなり起業しろと言われても、ということところで、もっと早くからそういったマインドを作っていくことが大事だというお話だったかと思えます。

武内市長：

宮坂さんは北九州愛が非常に強い方で、東京と北九州の2拠点でお仕事をされていますが、北九州市を出て、東京に行かざるを得なかった理由について、本音をお聞かせいただけますでしょうか。

宮坂氏：

大学卒業年度が2019年で、ちょうど2020年に東京オリンピックが開催されると言われているような時期でした。オリンピックで海外からのインバウンドが盛り上がっていくような状況で、日本の中心、ど真ん中の東京という安直な考えではあったのですが、最先端の都市

で学びたい、成長したいという思いがあり、東京のベンチャー企業に就職したのが、上京したきっかけになります。

武内市長：

北九州が物足りなかったというわけではなくてですか。

宮坂氏：

そうですね。

武内市長：

北九州市に欠けているピースはありますか。

宮坂氏：

それこそ「稼げるまち」だと思っています。自身の会社のクライアントも東京や大阪が圧倒的に多いので、地方でも、北九州市でも稼いでいけるようなまちになるには、やはり外から、海外からのお金流れを作る必要があります。もっともっと稼げるまちにしていくべきなのではないかと思います。

進行（丸川氏）：

ありがとうございます。私自身も小倉の出身で、いまは大阪に住んでいて、このようにお仕事をさせていただいていますが、北九州が本当に良い所だなと思っておりまして、宮坂さんほど若くはないですが、ぜひ今後も関わっていきたいなと思っております。

それではお待たせしました。続いて、松永さまより「稼げるまち」についてお願いします。

松永氏：

先ほど市長の話のキーワードとして、時代が急速に変わっているということがありました。時代が変わるということは、産業の構造も変わるということですので、今までやっていた仕事がいらなくなることもあれば、時代が必要としている新しい能力、技術、知恵を新たに身につける必要がある、そんな時代に来ていると思います。

「リスクリング」という言葉が最近使われていますが、北九州でもそういったことに取り組んでいく必要があると思っています。我々の組織がお手伝いしている中の一つに DX があります。ある中小企業で IoT をやろうとした時に、誰もやれる人が居なかったのですが、経理の女性が一人手を挙げられました。経理の女性は文系の方でしたが、自身で学び、仲間を作り、仲間と共に学んで、企業の IoT どんどん進められ、会社の雰囲気非常に変わっていききました。それによって実は生産性が上がり、いずれは給与も上げていただきたいということで、そういうことができるということです。そういうことができるまちとするために、行政や組織がお手伝いしていきたいと思っています。

もう一つは、グローバルを意識せざるを得ないということです。そのためには、残念ながら、共通言語は英語ですので、いま小学校から英語教育がありますが、もう少しコミュニケーションができる英語を若い人たちに身に付けていただくと、そういう能力が必要な企業が

来てくれるでしょうし、地元の企業もグローバルに発展していく。これが、稼げる要素の一つだと思いますので、そういったまちになれるよう、我々も協力していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

進行（丸川氏）：

ありがとうございます。新しい時代に必要な能力は変わってきているというお話と、リスキングとありましたが、ありていに言うと「学び直し」ということかと思いますが、若い人だけではなく、長く働いていらっしゃる方でも、もう一度新しいスキルセットを身につけていかなければならない。それを市としてもバックアップしていくことが、稼げるまちをつくるうえで大事なことなのではないかと思いました。

武内市長：

時代の変化が大きいなかで、どういうまちをつくっていくのか。色々なご意見をいただくなかで、大きな工場が撤退することでぐらつくようなまちの構造は変えてほしい、という意見をいただいたことがあります。大工場、大企業に一本足ではなく、産業の裾野を広げて、色々な人材が育っていくような生態系を作っていく。裾野の広い産業構造を望む声もいただいているので、時代の変化に強いまちを強く意識すべきだと改めて思いました。

進行（丸川氏）

ありがとうございました。続いて、「彩りあるまち」の実現をテーマとします。

「彩りあるまち」の実現の戦略としては、まず、民間投資を喚起しながら、魅力的な街並みや生活環境など、「彩りのある空間」の整備。次に、文化芸術・スポーツの振興、観光地の魅力向上など、「彩りある時」を体感できる環境の整備。さらに、教育環境を充実し、子どもたちの将来の可能性を引き出すことで、「彩りある人」を育むことです。こうした取組により、輝く個性と楽しさがあふれるまちを目指していきます。

それでは、まずお一人目、宮坂さま、「彩りあるまち」の実現に向けたポイントについて、お話をお願いします。

宮坂氏：

やはり、「若者が帰ってきたくなるようなまち」を目指すことが重要になるのではないかと思います。それはどういったまちかというと、働きやすく住みやすいまちです。特に女性は結婚や出産などがありますので、そういったことを経ても働きやすい、子育てしやすいというところで帰ってきたくなるような制度がある住みやすいまちを目指していきたいと思っています。

また、グローバル人材のところでは、人口を増やしていく点で外国人の留学生や実習生が入ってくることも考えられますので、先ほど松永理事長からもありましたように英語力のアップはもちろんですが、インバウンドの外国人の方にどんどん来ていただけるような、観光面でのPRの取組みも必要ではないかと思っております。

進行（丸川氏）：

噂で、インバウンドのツアーをやっているとお聞きしましたが。

宮坂氏：

パソコン一台で世界中どこでも働くことができるような IT スキルなどの能力を持った、ノマドワーカーと呼ばれる方々があります。日本の中でも特に最近は福岡に来られる方が多いのですが、福岡から熊本や鹿児島まで下る中で、北九州という選択肢がなかなか少なかったため、北九州に来てもらえないかなとノマドワーカー向けのツアーを始めました。

進行（丸川氏）：

すごいですね。そういうマーケットというか、ターゲットがいるのだなと驚きがありました。ありがとうございます。

続いて、お二人目、松永さまより「彩りあるまち」についてお話をお願いします。

松永氏：

人間は、仕事と遊びとその両方が両立しなくては、楽しく生きていけないと思うのですが、そのために実は“まち”があると思っています。北九州は外国人が非常に多く、学研究都市では学生が 2400 名いる中で、800 名が外国人留学生です。ところがあまり違和感がない。ただ、残念なことに、彼らはあまりまちに出て遊ぶことをしないので、もっと遊びに出るようなまちづくりができれば、すごく元気が出てくるのではないかと思います。

北九州は自然もあり、遊ぶところもあり、観光する場所もあり、博多ほどではないですがショッピングするところもそこそこあります。でも、「ここに行きたい」という場所が実はあまりありません。これは PR 不足かもしれないですが、特に若い人たちが行きたいという場所を作らなければ、まちは元気にならないと思いますので、色々な人たちが集える場所で、中には北九州に多くいる理工系の大学生などが色々な人と交わる場所を作ることができれば、もっと元気になるのではないかと思います。

進行（丸川氏）：

実はたくさん色々なところから北九州市には来てもらっているが、楽しんでもらえていない、遊ぶ場所の選択肢のアピールができておらず、提供できていないのではないかというお話でしたが、武内市長からおすすめの場所などはありますか。

武内市長：

来てみると、住んでみると北九州市は良い所だと皆さん言ってくださるので、一度来ていただきたいというところですが、例えば、小倉城は最近攻めていますね。天守閣でパーティーができるとか、北九州国際映画祭でも、多くの俳優の方や、映画関係者の皆さんが天守閣でレセプションをしました。また、小倉城のライブ中継をしている YouTube チャンネルが、アメリカやブラジルで 20 万人以上フォローされているなどブームになっていたり、最近は深夜まで小倉城でクラブをして、外国人の方が集まって踊って楽しまれているなど、城の使い方やあり方の是非は色々とおもいますが、やり様によっては魅力はまだまだあると

思います。何といっても、北九州市に転勤になる際に、単身赴任で家族を置いてこられてしまうことが非常に悔しいです。家族も連れてきたくなるような教育の選択肢や、まちの楽しさなど、その部分を変えていきたいと思います。

進行（丸川氏）：

私も今回、色々な方にお話を伺ったのですが、北九州は良い所だとおっしゃる方が非常に多い一方で、北九州の方はそれをあまりご存じない。小倉城の現状も情報として入ってきていないのではないかと思いますので、まずは知ることが大事なのではないかと思いました。それではお待たせしました、続いて、津田さまよりお願いいたします。

津田氏：

実は、私は福岡生まれでして、福岡、東京、シカゴとそれぞれ10年以上住んで、北九州に来て20年になりますが、北九州は新鮮に見ていました。こちらに来て、一番驚いて気に入ったのは、コンパクトシティ小倉です。デパートで買い物して、美術館に行って、劇場に行って、食事をして、お酒を飲むということを歩く範囲でできるというのは、このまちだけで、世界中でも本当に珍しいまちだと思います。それに加えて、ミクニスタジアムも近いですし、この国際会議場や展示場などもウォーキングディスタンスです。この素晴らしいコンパクトシティをさらに深めていただければ、歩くということを中心に、この小倉のまちがまとまっていければと思います。

また、先ほど外国人留学生を街中ではあまり見ないとありました。確かにそうだなと思いますが、祭りの時には結構見かけるかなと思います。あれには驚きました。百万夏まつりの際には、若者の数もすごかったですが、留学生の方々も非常に楽しそうにされていました。北九州の祭りの多さは素晴らしいですね。コミュニティがしっかりとつながっているということです。

また、新しく小倉城に作られた「竹あかり」は、環境にまで配慮しており、たくさんの方がつながっていくということで、これもまた大事にしていければと思います。

まちの方向性としては、たくさんの方々が集まる様子を見たときに、私もわくわくしたのですが、やはり、若者が集まるまち、若者が集まりたくなるまち、というのは絶対に外せない方向だと思います。

進行（丸川氏）：

ありがとうございます。若者が集まる、魅力的な、情熱というところで、祭の話もありましたが、先日、こちらで学会がある友人を案内したのですが、祭の祇園太鼓の音が街中に鳴り響いていると、中の人にとっては自然なことであっても、外から来た人たちにとっては「何だこれは」と興味を持ってもらえるコンテンツ、魅力あるものではないかと思いました。このような既にある彩りを、外の人にとどのように伝えていくかも大事なのではないかと思います。

続いて、3つ目のテーマである「安らぐまち」の実現に移りたいと思います。

「安らぐまち」の実現の戦略としましては、まず、防災・防犯、社会インフラの維持など、「生活基盤の安心」を支えることをベースに質の高い介護・医療などのサービスが提供され、多様性を認め合いながら地域のつながりを感じることができる「暮らしの安心」を支えています。また、希望する人が安心して出産し、育児や子どもの成長を社会全体で支える「子どもや子育ての安心」を感じることができる環境を整備していきます。こうした取組により「誰もがつながるアットホームなまち」を目指していきます。

それでは、まずお一人目、松永さま、「安らぐまち」の実現に向けたポイントについて、お話をお願いします。

松永氏：

まず一つ目は、先ほど市長からもあったように、北九州市は本当に災害の無いまちです。ただ、以前は水害もありましたし、それを災害の無いまちにしているわけですが、実は山がすぐそばにあり、山があれば当然がけ崩れが起こりやすく、現実にも起こっていますので、人が住んでおられるところの基盤をもっと強固にしていくことが大切である。逆を言えば、さらにコンパクトシティ化していくことによって、人が災害にあわなければいいわけですから、人の命を第一優先に、これからもまちづくりをしていかなければならないと思います。

気候変動はご存じの通り激しく、ついこの間まで暑かったのに今日は寒いというようなあり得ないことが起こっています。そのような中で、災害に強いまちということ在全国に知られるような活動をしていただいて、人が集まって来られるまち、というところが一番重要なファクターだと思っています。

進行（丸川氏）：

ありがとうございます。防災の観点からお話をいただいたかなと思います。つながりといいますが、仕組みを整えていくこともそうですし、近隣の皆さんとどうやってみんなの命を守るかを考えていくことも大切ではないかと思います。

続いて、お二人目、津田さまからお願いします。

津田氏：

ここに書かれている「安らぐまち」の実現、とは少し違うかもしれませんが、私どもの会社は、日本中にばらばらにいた開発系の人間を、全部黒崎に集めました。それはなぜかという、やはり人は近くでコミュニケーションを取りながら、わいわいがやがや仕事をするのが一番だからです。もちろん、事情によってはリモートワークができる環境も整えているのですが、職住接近でこんなに素晴らしいまちはないと、皆さん実はとても喜んでくれました。何かあれば、共働きしていても、すぐに子どもを迎えに行くことができますし、東京のように1時間半かけずとも、すぐに帰ることができます。このような素晴らしいまちでありたいと思います。

また、安川電機の標語として、会社の中にも大きく掲げていますが、「原動力は北九州、動かすのは世界」ということで、社員はこれをモットーに働いています。

北九州の良さは、中にいるとなかなか分からないと思うのですが、色々なところを渡り歩いている中で本当に素晴らしいまちだと思います。その中で一つ苦しいと思うのが、高齢者が多くなってきている点です。この高齢者の方をどのように前に進めていくか。先ほど申し上げた、若者がこのまちに活力を与えるという方向性は間違えてはいけませんが、日本の社会全体が高齢化に進む中で、北九州市はトップランナーとなっています。そのような中で、高齢者がコミュニティで活躍できるような場所をうまく準備しながら、先ほどの祭の話などもそうですが、色々な形で高齢者が入り込めるようなコミュニティを作ることができればと思っています。

進行（丸川氏）：

ありがとうございます。職住、働き方もそうですし、高齢者の方も一緒にまちづくりをしていくということも大事なかなと思います。

それでは続いて、宮坂さま、若者代表ということではないですが、お願いします。

宮坂氏：

若者もそうですが、特に女性に関して思うのは、仕事や結婚、出産の何かを諦めざるを得ない状況になることを、東京に居る時より北九州に居る時の方がその圧を感じてしまうことが正直あります。

一方で、北九州市は九州の中で子育てしやすいまちランキング1位ということをご存じでしたでしょうか。あまり知られていなかったかもしれないですね。そういったデータもありますので、我々もそういった部分を知っていきたいなと思います。

また、先ほど津田会頭からもありましたが、高齢者が多い中、どうやっていけば良いかという点については、市長がシニアエコノミーと言われていたように、まち全体で子育てができるような環境づくりができれば、高齢者、若者、子どもたちと色々なつながりができて新しいものが生れるのではないかと思います。

多世代で色々な価値観を受け入れる環境づくりも大事ですが、今日は高校生の方も多いということで、若者の目線で市長やパネラーの皆さんにお聞きしたいのですが、若者が物怖じせずに夢や意見を北九州で堂々と発言していい、ということでもよろしいでしょうか。今、皆さん頷いていただきましたので、会場におられる若者の皆さんは、どんどん夢や想いをぶつけていてもらえたらと思います。私自身も自分の想いを形にして仕事につなげたり、夢を叶えたりと、皆さんのロールモデルのような存在となれるようにやっていきたいと思っています。

進行（丸川氏）：

ありがとうございました。ここまで、「稼げるまち」「彩りあるまち」「安らぐまち」について、色々な視点からお話をいただきました。最後に武内市長から、全体を通じたところで、お話を伺えればと思います。

武内市長：

ありがとうございます。限られた時間ですが、皆さんから本当に深いコメントをいただきました。

今回の新しいビジョンは、みんなで同じところを目指して、北極星のようなものを作って、しっかりとそこで力を合わせていくことが目標ですが、今日お話を伺って、もう一度北九州市の魅力、底力を認識して磨けば、とてつもないまちになるなど改めて思いました。

また、これだけ高齢化率が高いことを思い切って強みに変えていく、価値に変えていく、そして、老若が交わって、若者も言いたいことを思い切って言う。日本や世界がまだ作れていないような世代間をミックスした、新しい価値を生み出すような、どこかの都市を真似るのではなく、北九州市の生き方、進み方、北九州 Way をこれからみなさんと一緒に描き進んでいきたいと思えます。

その際には、宮坂さんからあったように、若い人が波風立てることを恐れずに、どんどん発言してもらい、上の世代をかき混ぜてもらおう。知識があらかじめ無い事、経験が無い事が強みになり、だからこそ本質が見えてくることもあります。若い世代の方々にはどんどんチャレンジしていただきたいなと思えます。

進行（丸川氏）：

武内市長、ありがとうございました。以上でパネルトークは終了となります。ご登壇いただきましたパネリストの皆さん、ありがとうございました。

3. 質疑応答

進行（丸川氏）：

司会の方からありましたように皆さまから質疑を取っておりまして、いただいている質疑が77件あります。時間を延長して申し訳ありませんが、せっくなので市長に対する質問や疑問を是非ぶつけていただきたいと思えます。

まずお一人目、「福岡市は人や企業が集まる循環が生れていると思う。北九州市が魅力的なまちを、これからどのようにアピールして人や企業を呼び込もうとしているのか知りたい」と書いていただいた方、いらっしゃいますでしょうか。ぜひ思いを聞かせてください。

参加者：

今日、話の中で何度も出ていた福岡市のように、北九州市の他にも素晴らしい都市やライバルとなるような都市がたくさんあると思えます。私自身も友人が福岡や博多の方に行きたいと言っているのを何度も耳にしたことがあります。そんななかで、人や企業に北九州市を見もらうために、他の都市と比べて見劣りしない、頭一つ抜けるために、これから魅力的なまちをどうアピールして、人や企業を呼びこんでいこうとしているのかを知りたいです。

武内市長：

ありがとうございます。周りの人から聞く声は、やはりリアルな声ですね。

今日お話ししたように、産業や会社があるときの北九州の利点は、技術力や災害が少ないなどたくさんありますが、もちろんそれをしっかりとアピールしていき、多くの人や企業が集まり、まちを楽しくしていく必要があると思えます。

ただ、他市も同様に頑張るなかで、北九州の売り、尖った部分をどうするのかというご質問かと思いますが、先ほど津田会頭からもありました、コンパクトに色々なものがまとまっているということ、まちのごちゃごちゃ感が素敵だと以前若者がおっしゃっていたこともあります。ごちゃごちゃ感というのは乱雑に色々なものがあるというよりも、綺麗に街路やビルが整備されてという価値観ではなくて、色々なものがぎゅっと集まっていて、北九州市の生活感、人肌感、体温が感じられる、北九州ならではのビートが感じられるということです。コロナを機に人々は離れて、デジタル化が進みましたが、コロナを経て、北九州市というまちでは人との距離感や、人の体温、人と人との掛け合いが強みになると思います。そういった点をまちづくりや、人を呼び込む際にアピールしていきたいと思います。ご質問ありがとうございました。

進行（丸川氏）：

ありがとうございました。次の質問に参りたいと思います。

匿名の方になりますが、ぜひいらっしゃいましたら発言をお願いします。「北九州市にとって雇用は最も大切だと思うが、人口増を目指すのであれば教育の底上げや充実は必須と思う。親の立場であれば、子どもにとって教育環境の良い地域に住みたいと思う。これからの教育政策について聞きたいです。」と書いてくださった方、いらっしゃいますでしょうか。おられないようですので、市長から教育政策について回答をお願いします。

武内市長：

まさしくそうですね。先ほどお話ししたように、他の地域から転勤で来られるという際に、例えばご主人が転勤という時に、家族は一緒に行こうとならず、単身赴任になるケースが多いということで、その際にネックとなる、不安を感じる部分が教育だという声も聞いています。そういった意味で教育の選択肢、教育のスタイル、私立・公立を含めた様々な選択肢があり、横の幅を広げていくということ。また、不登校の方の課題もあります。教育のバリエーションを広げて、それぞれの皆さんが自分の力やスタイルで学べる環境が大事だと思います。色々なお子さん、教育を受ける方が、自分らしい選択ができるような、教育の選択肢を広げていくことは、これから強化していきたいと思います。

今年の予算でも、柔軟な幅広い教育の選択肢を増やそうという方向で取組んでいます。例えば、数学な得意な方に向けて、数学の力を伸ばしていこうという「スー1GP」というイベントも開催しています。1人1人にフォーカスをした教育の仕組み、あり方をこれからも追及していきたいと思っています。

実際に、北九州市内の教育分野で、ユニークな取組をされている先生方や学校も出てきていますので、そういったところも伸ばしていきたいと思います。

進行（丸川氏）：

それではもう一つだけ、せっかくだいていますので、紹介します。「3つの戦略の中で、なぜ、「稼げるまち」が一番最初なのですか」と、とてもシンプルに書いてくださいました方、いらっしゃいますでしょうか。もしいらっしゃいましたら挙手をお願いします。

参加者：

医療、介護、教育、子育てなど色々ある中で、なぜ、「稼げるまち」が一番初めなのか、知りたいと思って質問をしました。

武内市長：

ありがとうございます。非常に大事な質問だと思います。

端的に答えると、今、とても稼げていないからです。今日お話ししたように、北九州市は他の都市の中で、この10年間～15年間を見て、圧倒的に稼げる力が落ちてしまっている、それによって人が減ってきている。この循環を止めるのがまずは最優先で、しっかりと稼ぐ方向に持っていかなくてはいけない。ただ、稼ぐことが人生の目的、まちの目的ではないですよ。稼いだ元手で、教育や文化、福祉や医療、まちの潤いに回していく。その元手を作らなければならないというのが、いま一番大事なテーマです。

私も厚生労働省の出身で、元はと言えば、医療や福祉が専門分野ですが、本当に悔しい想いを何度もしてきました。やりたい事業やサービスがたくさんありましたが、予算がない、財源が厳しい、経済成長に翻していない、税収が減っているということで、新しいサービスは無理です、どちらかと言うと抑えなくては行けませんと、財政部門から言われて悔しい想いを何度もしてきました。やはり経済と福祉は両輪です。人を守るためには、しっかりと元手を作らなくては行けません。強くなければ人を守れない。でも、人を守れなければ強くはなれない。この循環を回していきたい。今、最初に必要なのは、低空飛行している稼ぐ力、それをまずに強くしていこうという思いです。

進行（丸川氏）：

ありがとうございました。大変申し訳ございませんが、時間がかかり伸びてしまいました。

武内市長：

いただいた70以上のご質問については、全てしっかりと受け止めさせていただき、検討の中で活かさせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

進行（丸川氏）：

多くの質問をいただきましてありがとうございました。

以上